

分岐的時間の表象を用いた 時制・モダリティの連関の説明の試み

渡 邊 淳 也

もう一度もどるなら時の流れを止めて
こんなはずじゃない時の流れに変えて
(中島みゆき『湾岸24時』)

1. はじめに¹

この論文の目的は、可能世界意味論 (*sémantique des mondes possibles*) の枠組みで提唱されている「分岐的時間 (*temps ramifié*)」の表象を用いることにより、いくつかの言語現象、とりわけ時制とモダリティとの連関を説明できることを示すことである。

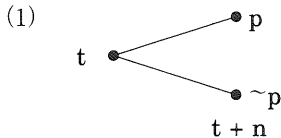
分岐的時間は、フランス語においては、単純未来、条件法、半過去の一部の用法 (*Si* 節内の半過去、間一髪半過去など)、認識的用法の準助動詞など、さまざまな事例に応用できると考えられる。以下では、図式を紹介したあと、主としてフランス語の条件法への適用、および関連するかぎり半過去などフランス語の他の動詞形態への応用、ならびに日本語の反実仮想の「た」との対照に範囲をしばって考えてゆきたい。

2. 分岐的時間の図式

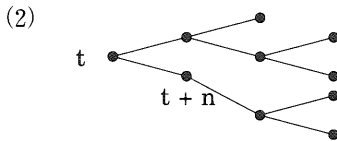
まず、分岐的時間とはどのようなものであるかを確認しておこう。いうまでもなく、分岐的時間の概念は、Hintikka (1962), Kripke (1963) など哲学・論理学的文脈に淵源するものであるが、言語学において分岐的時間を用いた研究としては、Tedeschi (1981), Vet (1981), Martin (1983), Perret (1994), Desclés (1995), Rocci (2000), Busuioc (2004), 定延 (2004) などがあげられる。以下では基本的に Martin (1983) の第1章に準拠し、必要に応じて部分的に手直しすることにした。

2.1. Martin (1983) の図式

以下, Martin (1983) の図式を要約して提示する。「クリプキ的」とよびうる概念化において, 可能性は分岐的時間にむすびついている。つぎの(1)の図にみるように, 時点 t において, 可能性は, $t + n$ における p が真である場合と偽である場合のふたつの支線を想定する。



$t + n$ においては, さらなる分岐を想定することが可能である。その結果, 時間はつぎの(2)の図にその一部がえがかれるように, 無限の分岐をくりかえすことになる。



(2)のなかで小さな黒丸で示されている, 分岐的時間におけるそれぞれの時点をも, 可能世界 (mondes possibles, 略号 m) という。

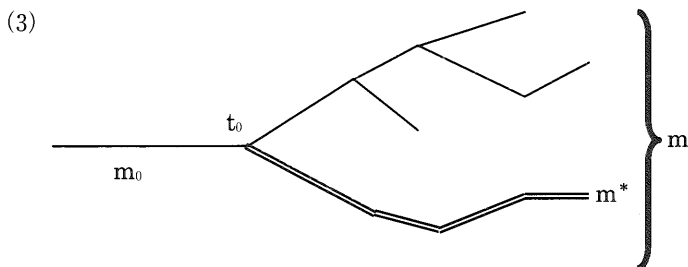
発話時点 t_0 において, 時間は, のちの進展の無限個の可能性の領野へとひらかれている。それらの可能性が一連の可能世界を形成する。ピエールがなにかを書いているとしよう。かれは最後まで書き終わるであろうか。一定のもっともらしさで, そのように想定することはできる。過去の事態の, いわば, 慣性によって, 延長線上に考えられ, 実現しそうな連鎖, つまり可能世界のなかでも優遇される連鎖がありうる。それを期待世界 (monde des attentes, m^*) とよぶ。もちろん, 期待世界もまた, 他の可能世界と同様, 実現がさまたげられることもありうる。

一方, 時間がたち, 未来が過去と化するとき, 可能世界のうちひとつだけが現実世界 (monde de ce qui est, m_0) となる。

これらふたつのいずれの面を優遇するかにより, 未来の表象はふたとおりあ

りうる。

第1に、 t_0 以降、無限個の可能世界をあらわれさせ、場合によってひとつあるいは複数の期待世界を孤立させるなら、(3)の図のように分岐的時間となり、



第2に、いくつもの可能性のなかから、実現するのは（具体的にどれであるかはわからなくても）ひとつしかない、という考えにもとづくなら、(4)のように直線的时间（temps linéaire）となる。

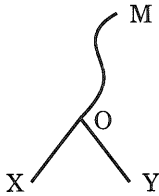


しかし、3.1節でみるように、同じ Martin (1983) の第3章では、前者の表象によって未来を扱うことがほぼ公理化している。 t_0 以降のみを機械的に可能世界であるとする扱いの適切性には疑問があるが、下記2.4節でふれることにする。

2.2. 「分岐的時間」の表象に対する批判

分岐的時間の表象にもとづく論は、素朴な形では古くからあり、それに対する批判も、つとに Bergson (1888) にみられる。Bergson は、つぎの(5)のように分岐的時間の表象を批判している。

(5)



Il ne faut pas oublier en effet que cette figure, véritable dédoublement de notre activité psychique dans l'espace, est purement symbolique, et, comme telle, ne pourra être construite que si l'on se place dans l'hypothèse d'une délibération achevée et d'une résolution prise. Vous aurez beau la tracer à l'avance ; c'est que vous vous supposerez alors arrivé au terme, et assistant par imagination à l'acte final. Bref, cette figure ne me montre pas l'action s'accomplissant, mais l'action accomplie. Ne me demandez donc pas si le moi, ayant parcouru le chemin MO et s'étant décidé pour X, pouvait ou ne pouvait pas opter pour Y : je répondrais que la question est vide de sens, parce qu'il n'y a pas de ligne MO, pas de point O, pas de chemin OX, pas de direction OY. Poser une pareille question, c'est admettre la possibilité de représenter adéquatement le temps par de l'espace, et une succession par une simultanéité.

[中略]

Mais cette figure représente une *chose*, et non pas un *progrès* ; elle correspond, dans son inertie, au souvenir en quelque sorte figé de la délibération tout entière et de la décision finale que l'on a prise : comment nous fournirait-elle la moindre indication sur le mouvement concret, sur le progrès dynamique, par lequel la délibération aboutit à l'acte ?

(Bergson 1888, 28ème édition en 1930, pp.137-138)

すなわち、分岐的時間の表象が意味をもつのは、あくまでもすべての道筋が尽くされたのちである、ということである。Bergsonによると、その表象が示しているのは、進行する行為ではなく、完遂された成果である。時間を空間によって、進行を事物によってあらわすことはできないというのである。

しかし、ここで確認しておきたいことは、Bergson が批判しているのは、

普段からひとが慣れ親しんでいる Y 字形の表象をそのまま認識論の世界にもちこむことである、ということである。哲学はだいたいにおいて常識批判の学問であるから、それは当然のことであろう。しかしこのことは、裏をかえせば、ひとはつねに分岐的時間の表象を思いだかずにはいられないということでもある。言語学においては、むしろその図式をもちいた説明がゆるされるのではなからうか。

2.3. 分岐的時間の表象には言語的には根拠がある

たとえば、つぎの例文をみよう。

(6) **Où en serait-je si j'avais choisi une autre route ?** M'étant engagé dans la vie politique, avais-je commis une erreur en optant pour le Parti communiste ?

(J. Bruhat, *Il n'est jamais trop tard*, p.108)

この例では、人生の時間的な過程が空間的な行程になぞらえられ、「もし別の道をえらんでいたら、わたしはいまごろどのあたりにいるのだろう」と、過去の分岐点でことなる方向に行っていたことを仮定して、その仮定のもとにありえた現在の状況を考えている。

また、日本語のつぎの例文は、現在が経済の推移のうえでの分岐点にあたるという認識を示すものである。

(7) 景気は踊り場か、それとも後退局面入りか——2004年末にかけて景気減速を示す指標が相次いで公表され、02年1月を谷とする今回の景気拡大局面が、重大な岐路に差しかかっていることが浮き彫りになった。

(毎日新聞、2005年1月11日)

このように、「人生のわかれ道」「岐路に立たされる」などの隠喩表現はありふれており、そうした表現の存在にかんがみても、分岐的時間の表象は、言語的には根拠があると思われる。そのようなかたちでの表現が可能であるのは、認識論の世界にそのままもちこむことを Bergson が批判した、ありふれた Y 字型の表象をひとはつねに用いているからであり、その表象によって言語使用を記述することは、まさに発話者の認知のありようを反映しているのである。

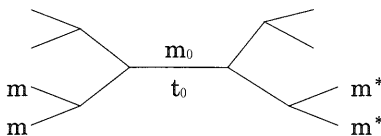
2.4. 分岐的時間の表象は過去にも適用しうる

Martin は、未来という時間が存在論的に有する性質に本質的に適合するのは可能世界へとわかれる分岐的時間での形象であるとしている（とくに第3章では、分岐的時間の表象によって未来を扱うことがほぼ公理化している）が、一方で、未来もやがて過去になることから、それを想定しての直線的時間の表象もみとめている。また、現実世界と可能世界とをわけるのは、多くの場合、 t_0 であるが、それは必然的なことではなく、過去も、認識的關係を介することにより、可能世界によるとらえかたができるとしている（Martin 1983, pp. 31, 140において、「 t_{0-k} における m 」，すなわち過去における可能世界というものを想定している）。

つまり、現実世界と可能世界とをわけるのは、（発話時点にもなりうるが）本質的に発話時点に固定しているのではなく、話者の視点の置きかたによってその境界が変わってくるといえる。未来にふたとおりの表象がありうるのも、話者の視点が発話時点にあるのか（分岐的時間），それとも未来にあるのか（直線的時間）によって出てくる差異である。そうであるなら、過去を可能世界によってとらえることもまた、まったくさしつかえはない。相対的に遠い過去に視点を置きさえすれば、それ以降の過去は可能世界としてとらえることができるのである。

なお、ここで過去の分岐の態様についてひとつ註釈をくわえておきたい。Busuioc (2004) はつぎの(8)の図のように、未来の分岐を後ろ向きに、過去の分岐を前向きに形象化している（すなわち、過去に関しては、遡行的にさまざまな原因を想定するような方向性になっている）が、本稿ではそのような考え方はとらず、過去の分岐点も未来のそれと同じく、後ろ向きにひらかれていると想定する。

(8)



—Busuioc (2004, p. 63)

なぜなら、(6)の例文に即して考えるとわかるように、過去の分岐点でことなる選択をしていたなら、その結果もちがっているというのが、言語における

仮定・帰結の通常のありかたであるからである。どちらの経路をたどっても同じ m_0 にいたりつくことができるのなら、分岐を想定する意義そのものが薄れてしまう²。

3. 諸事例への適用

つぎに、以上で見てきたような分岐的時間の表象を、いくつかの事例に適用してみるにより、その適切性を検証してゆこう。その前提的な作業として、まず Martin (1983) による条件法の分析を検討することからはじめよう。

3.1. Martin (1983) の条件法論

Martin (1983) は、分岐的時間の表象を用いて、条件法に関するあらたな議論をもたらした。Martin の条件法論の新しさは、時制的条件法・叙法的条件法の区分を、はじめて明示的に破棄したことであろう。その際問題になったのは、si... 節とともに用いられる仮定的用法であるが、簡単にいえば、Martin は、その用法を、可能世界に事行を位置づけるという点で、ある種の相対時制と見なしたのである。従前の区分にかわり、Martin は「可能世界の条件法 (conditionnel m)」と「領域移動の条件法 (conditionnel U)」の二分法を提起し、それにもとづいて論をすすめている (ibidem, pp.133 sqq)。

まず、可能世界の条件法からみてゆこう。可能世界の条件法の機能に対して用いられる一連の分析装置は、単純未来に対して用いられるものと共通している。まず、発話時点を境界として、過去・現在の時間が属する世界を、現実世界 (m_0) という。この現実世界は直線的时间という特徴をもっている。直線的时间においては、その要素となる諸命題の真偽値はすでにすべて確定しており、ひととおりに定まった連鎖があるのみである。それに対して、発話時点以降の時間は分岐的時間とされる。すなわち、発話時点からみて、まだ真偽値のさだまっていない命題の連鎖であるため、それらの命題の真偽に応じてさまざまな可能性へと枝わかれをくりかえす時間として形象化されるのである。可能世界 (m) とは、それらさまざまな可能性がなす複数の連鎖的時間をまとめている。可能世界のなかには、相対的に蓋然性が高いなどのため、優遇される連鎖がある。その連鎖は、期待世界 (m^*) とよばれる。単純未来は期待世界へと事行を位置づけ、可能世界の条件法は、可能世界へと事行を位置づける、という説明がなされている。

領域移動の条件法に移ろう。これまでに見てきた現実世界、可能世界、および期待世界はすべて、信念領域 (univers de croyance, U) に属している。信念領域は、話者が真と信ずる命題の総体である。その外に、異質信念領域 (hétéro-univers, U', 他者が真と信ずる命題の総体), 反信念領域 (anti-univers, Ū, 発話時点においては反実的な命題の総体) が想定される。領域移動の条件法は、信念領域から異質信念領域・反信念領域への移動を標示する。その移動により、みずからが言うことに話者が責任をもたない、あるいは完全にはもたないことが示されることになる。その場合、つぎの(9)~(11)のような、補足節をみちびく que や間接疑問の si, あるいは直接疑問形との相関で用いられる。

(9) Il m'a dit qu'il **viendrait** à Paris. (ibidem, p. 134)

(10) Il ne m'a pas dit s'il **viendrait** à Paris. (idem)

(11) **Serait-il** à Paris ? (idem)

また、「他者の言説をあらわす用法」(Watanabe 2001, 渡邊 2004を参照)もまた、Martin の枠組みでは、領域移動の条件法としてとらえられる。

(12) M. X **passerait** à Lyon avant de se rendre à... (Martin 1983, p. 136)

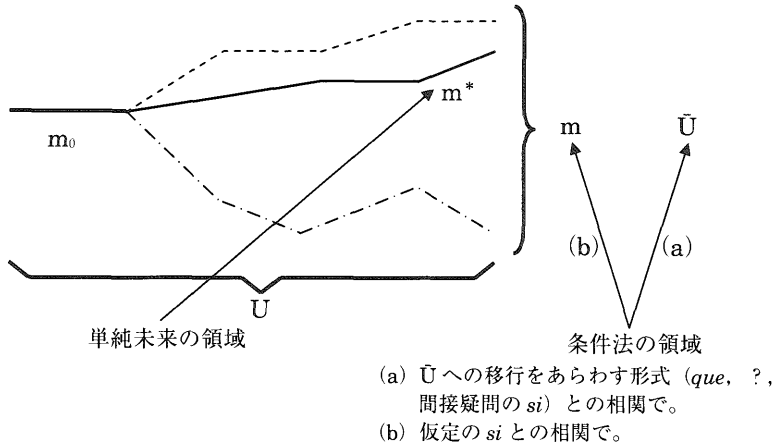
(13) M. X **serait passé** à Lyon avant de se rendre à... (idem)

これらの例において、話者は内容に対して反論もせず、また責任も負わないことから、事行は異質信念領域に位置づけられる、としている (ibidem, p. 137)。

以上をまとめていうと、つぎの(14)の図のように、単純未来は事行を期待世界に位置づけるのに対して、条件法は、事行を信念領域外に放擲するか(a), 信念領域内の可能世界に位置づける(b), ということになる。

以上でみてきたような Martin の条件法論については、si... を用いた假定構文における条件法の使用にあらたな説明をあたえた意義はあるものの、条件法の分析を「可能世界の条件法」と「領域移動の条件法」にはじめから二分することによって、条件法の機能を、ふたつの用法の統一性のない並列としてしかとらえられなくなるという問題点を指摘できる。また、その假定の si との問題にかぎっても、反実的な叙述内容であれば、假定構文によつてのべられることがらは、Martin 自身の枠組みでは、信念領域 U のなかの可能世界というよ

(14) Martin (1983, p. 134) による概略図



りは、実は反信念領域 \bar{U} に属しているのではないのか、という疑問がわく。その意味でもやはり、「可能世界の条件法」と「領域移動の条件法」の二分法によって条件法をとらえることが、うたがわしくなってくるのである³。

3.2. 条件法の本質的機能と分岐的時間による解釈

それでは、条件法の本質的機能はどのようにとらえられるのであろうか。その問題に関しては、本稿筆者はすでに、Watanabe (2001), 渡邊 (2004) などにおいて、つぎのような仮説を提出していた。

- (15) 条件法の本質的機能に関する仮説 (Watanabe 2001, p. 226; 渡邊 2004, p. 206; 一部改変)

条件法は、本質的に、現行の発話文連鎖（およびそれに表象されることがらの展開）の連続性とは異なる連続性を前提とし、条件法におかれた動詞の事行を、後者の連続性のなかに位置づける機能を果たす。

(La fonction essentielle du conditionnel est de supposer une continuité, que nous appellerons «hétérogène», différente de celle de l'enchaînement «actuel» d'énoncés (et du déroulement des faits représentés par ceux-ci), et de situer le procès du verbe dans cette continuité «hétérogène».)

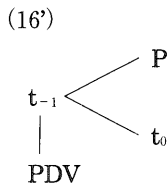
この図式は、文脈的要因とあわさることによって、条件法のさまざまな価値を生みだす祖型として構案されたものである⁴。そのような意味での祖型の記述としては、本稿においてもこの仮説を維持するが、以下では分岐的時間の表象を用いることによっても一貫した説明が可能であることを示してゆくことにする。分岐的時間による解釈は、もとより(15)の仮説と矛盾するものではなく、より積極的に、(15)で問題としているふたつの「連続性」の態様を、分岐したふたつの可能世界の態様によってくわしく示すことを可能にするという、補完的な意義をもつものである。次節3.3.からは、条件法の各用法に即して、分岐的時間の表象による説明の有効性を順次確認してゆくことにする。

3.3. 時制的条件法 (conditionnel temporel)

つぎの(16)の例にみるような、過去からみた未来をあらわす、条件法のいわゆる「時制的用法」は、分岐的時間の表象ががもっとも容易に適用できる用法である。

(16) [= (9)] Il m'a dit (t_{-1}) qu'il **viendrait** (P) à Paris.

なぜなら、典型的には、間接話法の主節の動詞が過去時制のとき、その補足節でもちいられるからである。主節の時制が過去時制であることが、2.4節でものべた「視点」(point de vue, PDVと略する)を過去の t_{-1} におくことを可能にする。そこからPを展望するのであるから、分岐的時間の図式はつぎの(16')の図ようになる。Pは発話時点 t_0 に直接定位されるのではなく、あくまでもPDV(t_{-1})を介して、PDV(t_{-1})からの後方性として定位される。そのため、Pと t_0 との直接の前後関係はきまっていない。



なお、Martin (1983)はこの用法を分岐的時間の問題とみなさず、間接話法の他者性を理由に、事行を話者の信念領域の外部に放擲する「領域移動の条

件法」であるとしている。しかしながら、時制的条件法自体は、つぎの例のような独立節での用法もあるので、領域移動がつねに起きているとはいえないのではなからうか。

(17) Il pleuvait. Le match **aurait** donc lieu en salle.

(Confais, 1990, p. 294)

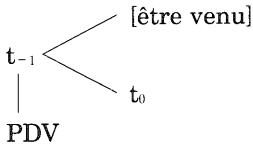
条件法が関係するもうひとつの事例として、(16)に手をくわえた(18)を検討することにしよう。

(18) Il m'a dit qu'il **serait venu** à Paris avant lundi.

いうまでもなく、(18)における条件法過去は、過去からみた前未来 (futur antérieur dans le passé) をあらわしている。この時制的条件法については、東郷 (2007, p. 22) が、Reichenbach 流の S, R, E の 3 つの因子では処理できない事例であるとしている。たしかに、(18)に即していうと、(i) 発話時点、(ii) il m'a dit の時点、(iii) serait venu の時点、そして (iv) serait venu にふくまれる完了を見切る基準となる時点 lundi の 4 つを区別しなければならなくなるので、Reichenbach の 3 因子では不足する。東郷はそのことから、「視点」と「基準点」を区別することを提唱している。視点とは、「話し手（または話し手が自己を投影する人物）が、その時点に身をおいて、そこから過去を振り返り、未来を望むことができるような時点」、そして基準点とは、「話し手（または話し手が自己を投影する人物）が、ある出来事 E1 を時間軸上に位置づけるときに利用する他の出来事 E2 の起きた時点」と定義される (東郷, ad loc.)。しかし、条件法過去の時制的用法が包蔵する完了性については、分岐的時間において問題となる前望 (prospexion) ではなく、逆に結果状態 [être venu] からみた回顧 (rétrospection) が問題になっている (したがって、分岐的時間ではなくて直線的时间である) ため、直接には分岐的時間の図式のなかに位置づけることはできない。厳密に位置づけるとすると、[être venu] の位置から (分岐的にではなく) 直線的に左方にさかのぼった位置に P (venir) が位置づけられることになろう。本稿では分岐的時間の表象に焦点化した議論を試みているので、かかる完了性については結果状態に対応する [être venu] でくくってコンパクトに表示することとし、その [être venu] を過去の分岐点 PDV (t_{-1})

から展望するという図式を提案したい。完了相を包蔵した一事態として [être venu] をとらえるこの扱いはまた、間接話法によって形成される「過去からみた『前未来』」という入れ子構造によっても正当化されうる⁵。結果として、(18) はつぎの(18')のように図式化することができる。なお、本稿でいう「視点」(PDV) は、東郷 (2007) のいう「視点」と同様の意味あいを用いていることを註記しておきたい⁶。

(18')



3.4. 反実仮想の条件法 (conditionnel contrefactuel)

分岐的時間の図式によって、条件法の反実仮想用法を説明することもできるように思われる。すなわち、つぎの(19)のような例である。

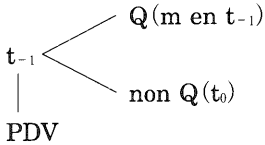
(19) [...] s'il **avait** la chance de prendre un beau poisson, en dessous de l'écluse du canal (P), on le **vendrait** et on **achèterait** du pain. (Q).

(E. Zola, *Germinal*, p. 192)

こうした例も、(16')と類像的な「過去 (次の図(19')における t_{-1}) からみた可能世界 m 」として理解することができる。ここで、現実世界 (t_0 における non Q) とは異なる可能世界 (Q となる世界) を構築するために過去 t_{-1} に遡行しているのは、可能世界を生成しうる分岐が時間的に先立っていることに由来する。「過去の分岐点 t_{-1} からの可能世界」とは、日常語的な表現でいけば、「今にいたるなりゆきがかもし違っていたらありうる世界」である。しかし、現実には、non Q は既成であるため、Q は t_{-1} からみた、現実とはことなる m としてしか想定することができないのである。

また、(19')の図式による反実仮想用法の説明のすぐれた点は、si 節内でもちいられている半過去も、その可能世界への分岐の起点となる過去 (t_{-1}) をさししめす時制的用法として説明できることである。これにより、モデルな用法の最たるものとして考えられてきた si 節内の半過去も、実はある種の過

(19')



去性を保持しているということになり、均質な説明が可能になるのである⁷。

ただし、ここで注意すべきことは、Pが直接 t_{-1} に位置づけられているわけではないことである。 t_{-1} に位置づけられているのは、Pを考慮する際の視点となる PDV である。半過去が視点 PDV を過去に位置づけるが、半過去におかれた動詞の事行そのものは過去には位置しないという事例は、ほかの用法にもみられる。たとえば、(20)のような、予定（したがって、事行そのものの位置づけとしては未来のこと）をのべる半過去がその一例である。ここでは、「*mais je n'irai pas*」によっていまでは取り消されている予定が予定として成立していた過去に視点を置いているからこそ、過去の視点をさす半過去が用いられるのである。

(20) Lundi prochain, il y **avait** un match ; mais je n'irai pas.

(Maingueneau 1999, p. 93)

なお、以上で提案した反実仮定の条件法の考えかたは、Trévisse (1999) の仮説にも比せられうるように思われる。Trevisse は、Culioli 理論に準拠して、条件法の機能を「仮構的定位」(*repère fictif*) からの「照準」(*visée*) を標示することであるとしているが⁸、非現実用法における「仮構的定位」のあらわれを論ずる段になると、つぎの引用にみられるように、

(21) [L'énonciateur] se remet, pour ainsi dire, grâce au repère fictif décroché, à **un stade antérieur, où les bifurcations vers p et vers non p était encore dans le domaine du possible**, mais en sachant qu'une seule des deux branches a pu être le cas dans l'extralinguistique, révolu et actuel.

(Trévisse 1999, p. 41; 強調引用者)

P と non P にむかう分岐を可能にするのは、それらの時間的な「前段階」(stade antérieur) にたつことであるとしており、分岐的時間の概念に近づいてくることになる⁹⁾。

また、Gosselin (2006) の考えかたも、本稿の仮説とおおまかな方向性は一致している。Gosselin の仮説は、假定構文 Si P, Q は P の前望的可能性 (possibilité prospective; ある時点において有効な、それ以降に事行が妥当である可能性) を前提とするものであり、そのなかで半過去は、P を直接過去に位置づけるのではなく、その前望的可能性を過去に位置づけるとしている。Gosselin のいう前望的可能性は、(18') の図式でいえば、分岐点 t_{-1} から可能世界を展望する視線の方向性に対応しているといえる。

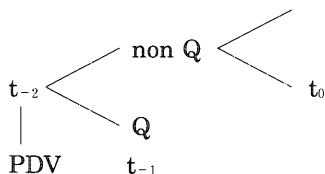
つぎに、(22) のような条件法過去についてはどうであろうか。

- (22) Si j'avais su parler le polonais ou le yiddish (P), j'aurais pu, peut-être, avoir quelques échanges avec lui (Q).

(D. Bailly, *Traqués, cachés, vivants des enfants juifs en France*, p. 137)

ここでは、(22') の図で示したように、彼との交流ができた (Q) か、できなかった (non Q) が問題となるのがすでに過去 (t_{-1}) のことであるので、さらなる過去 (t_{-2}) まで遡行することによってのみ Q を生成する分岐が構築できることとなる。このとき、Si 節中で大過去が用いられるのは、 t_{-2} を示すという、通常の大過去の時制的用法によって説明できる。ただし、ここでもまた、大過去は P を直接 t_{-2} に位置づけるのではなく、それを考慮する際の視点 PDV を「過去からみた過去」に位置づけているのである。

(22')



この用法の Si 節での大過去の使用を理解するには、 t_{-1} と t_{-2} の二重性を用いた時制的な説明のほうが相対的にうまくゆくことがわかる。なぜなら、事実

のレベルで t_0 から t_{-1} へ遡行することと同様の前後関係に沿って、さらに分岐生成のために t_{-1} から t_{-2} へ遡行するという二重の過去性によって、大過去という時制の使用が直接的に説明できるからである。

なお、上記からわかるように、条件法過去に関しては、時制的用法とはちがった図式を用いている。その理由は、時制的用法においては、条件法過去の完了性が、典型的には間接話法の入れ子構造のなかに入った前未来の完了性であったのに対して、反実仮想における条件法過去の完了性は、前未来を基底とするものではなく、 $\langle \text{Si} + \text{大過去} \rangle$ にもみられる条件の二重の過去性のうちの一方に対応しているからである。

以上で試みてきた反実仮想用法に対する説明は、同じ分岐的時間の概念を使っているながらも、3.1節でみた Martin (1983) による説明とはことなる。相違点は、Martin においては、条件法現在による反実仮想の標示が、あくまでも発話時点 t_0 からわかれ出た可能世界によって説明されており、過去の分岐点からわかれ出た可能世界 ($m \text{ en } t_{0-k}$; *ibidem*, p.140) が発動されるのは条件法過去の場合にかざられているということである¹⁰。つまり、条件法過去が複合時制（完了時制）であることからくる過去性を t_{0-k} に反映しているのである。しかも Martin は、その場合も、本稿でいう t_{-2} のように二重に過去であるとはしていない。ところが、条件法過去でのみ過去の分岐点を問題とする説明は、現在の反実仮想の Si 節内で半過去、過去の反実仮想の Si 節内で大過去といった、それぞれ一段古い時間帯をさす時制がもちいられることを直接説明することができないという問題がある。

なお、 $\langle \text{Si} + \text{大過去}, \text{条件法過去} \rangle$ の構文には、(22)のように過去の非現実性をあらわすのではなく、 $\langle \text{Si} + \text{半過去}, \text{条件法現在} \rangle$ よりさらに非現実性が強いことをあらわす用法もある。Fauconnier (1984) は、つぎの例をあげて、

(23) Si Boris **vient** demain, Olga **sera** heureuse. (*ibidem*, p. 144)

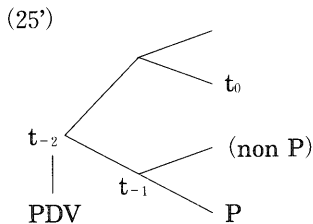
(24) Si Boris **venait** demain, Olga **serait** heureuse. (*idem*)

(25) Si Boris **était venu** demain, Olga **aurait été** heureuse. (*idem*)

それぞれの例の解釈について、つぎのようにいっている。(23)は内容の現実性が確立されているか、不定のときに使えるが、非現実性が確立されているときには使えない。(24)は内容の現実性が不定か、または非現実性が確立されているときに使えるが、現実性が確立されているときには使えない。それに対して、

(25) は、非現実性が確立されているときにしか使えない (ibidem, pp. 144-145)。これを要するに、時制が過去方向にずれるにしたがって、非現実的な解釈になってくるのである。

ここでは、これまで扱っていない用法である (25) を問題にしなければならないが、(25) もまた、(22') の図式を部分的に応用することで説明できると考えている。(25) ではもはや Q は t_{-1} には位置づけられないので、その点のみは (22') とちがっているが、それを犠牲にしても、 P を見る視点 PDV を t_{-2} に位置づけることをあえて選択することにより、非現実性が強調されることになるのである。そのような方法によって非現実性が強調できる理由は、つぎのように説明できる。分岐的時間の表象の、右がわにゆくほど大きく開いた形状を見るとわかるように、分岐点が遠ければ遠いほど、そこからわかれ出た複数の可能世界のあいだのへだたりも大きくなる。つまり、 t_{-2} という、一段と遠い分岐点からわかれ出た仮想であるので、(25) は (24) よりも一層現実からへだたっているものとして想定できるのである。このことを図示すると (25') のようになる。



3.5. 他者の言説をあらわす条件法 (conditionnel du discours d'autrui)

分岐的時間の図式によって、他者の言説をあらわす条件法を説明することもできる。他者の言説をあらわす条件法とは、条件法現在に関しては、つぎの (26) のような例である。

- (26) Selon le quotidien *Liberté* de mardi, qui fait l'état de «sources bien informées», il [=le bilan du massacre en Algérie] **serait** (P) de 428 morts et de 140 blessés. (Le Monde, le 14 janvier 1998)

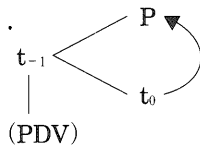
P を他者の言説として構築するために、 P は分岐的時間の表象において t_0 と

はことなる支線に位置づけられることになる。ことなる支線を生成するためには、ここでもまた、 t_{-1} に遡行して分岐点 PDV を構築しなければならない。この際、 t_{-1} は、間接話法における時制的条件法と同じく、一般的に言えば、原発話時〔(26)にかぎっていえば、*Le Monde*の記事の情報源となる *Liberté*の記事が書かれた、または読まれた時点〕である。しかし、時制的条件法とちがうところは、原発言時 t_{-1} が暗黙になっていることである。このことにより、P は「時制の呼応 *concordance des temps*」をまぬかれ、PDV はいわば背景化され、P の定位は PDV を介することなく t_0 から直接なされることになる¹¹。したがって、他者の言説をあらわす用法においては、条件法現在、 t_0 からみた同時性ないし未来を、そして、あとでみる条件法過去は、 t_0 からみた過去ないし完了をあらわすことになり、条件法の両時制の使い分けが時制的用法とはちがってくる。ここで、「時制の呼応の有無で時制的用法と他者の言説をあらわす用法をわけよう」とすると、独立節での時制的用法との差異化が問題になるのではないか」という反問が予想される。しかし、たとえばつぎの例、

(27) [= (17)] Il pleuvait. Le match **aurait** donc lieu en salle.

においては、il pleuvait によって PDV が明示されているところが、(26)の場合とはちがうのである。以上をまとめると、(26)は(26')のような関係をあらわしていることになる。(PDV)はPDVの背景化を示しており、矢印は t_0 からなされる直接の定位を示している。

(26')



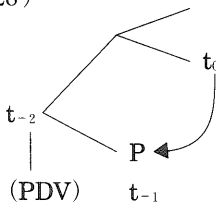
つぎに、(28)のような条件法過去の例について考えることにしよう。

(28) M. Nétanyahou, selon les fuites de presse qui se sont presque toutes révélées exactes depuis le début de l'affaire, **aurait fait** (P) alors preuve de «mauvaise volonté» face aux enquêteurs.

(Le Monde, le 18 avril 1997)

ここでも、(26)の場合と同様、他者によってになわれたPを構築するために、発話者の位置する t_0 とはことなる支線に入る必要がある。そのための分岐を生成する遡行が、条件法過去の場合は t_{-1} から t_{-2} への遡行である。PDVから、 t_0 とはことなる支線に入る分岐が間主観的な他者性によってなされているという点で反実仮想用法とちがっているが、図式の基本的布置は反実仮想用法に似ている。そして、ここでもまた、PはPDV(t_{-2})を介することなく、 t_0 から直接の関係での定位がなされており、 t_{-1} の過去性は発話時点からみた過去性である。その理由もまた、(26)の条件法現在の場合と同様である。図式は(28')のようになる。

(28')



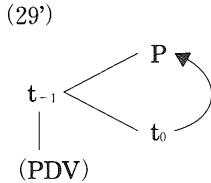
3.6. 語調緩和の条件法 (conditionel d'atténuation)

つぎに、(29)のようないわゆる「語調緩和の条件法」について考察しよう。「いわゆる」と留保をつけたのは、この用法の条件法がほんとうに語調緩和を標示しているのかという疑念が出されているからである。Confais (1990, p. 299) はむしろ、「状況との関与性」や「行為への方向づけ」を標示するとしている¹²。しかしもちろん、「語調緩和」もありうる意味効果のひとつではあるので、ここでは便宜的に「語調緩和の条件法」と呼んでおく。

(29) Il **faudrait** (P) qu'on fasse des courses. (Confais 1990, p. 294)

この用法についてはすでに Watanabe (2001, pp. 228-229) および渡邊 (2004, pp. 217-218) でのべたように、発話者は、「このような状況なら買い物に行かなければならない」というような、潜在的にはだれもが依拠しうる一般則の名において語っており、そのことによって判断主体が不特定の他者にずらされて

いると考えられる。したがって、この用法における分岐的時間の布置は、他者の言説をあらわす用法に類するものであり、(29')のようなかたちで示すことができる。



ここでも、PDVは背景化されており、Pの定位は t_0 から直接なされていると見ることができる。

言説の他者性を展望する基点となるPDV (t_{-1})についていうと、この場合は他者の言説をあらわす用法の場合以上にその時間的性格がはっきりしないように思われるかもしれない。しかしここでは、 t_{-1} は、発話にさきだつ、発話者によるPの判断の逡巡に対応するものとして理解することができる。発話者は、みずから判断をくだすことができないからこそ、Pを直截には断定せず、(29')のような他者性を介在させるにいたっているのである。こうした条件法にみとめられる「緩和」という意味効果は、いま述べた、発話者によるPの判断の逡巡にも負うているのである。

4. 他の言語にみられる仮定性と過去性の相関

井元 (2007, p. 1) が指摘するように、仮定構文に過去時制があらわれる現象は、細部の相違はあるものの、さまざまな言語に共通して見られることである。

(30) 明日晴れたら森を散歩するんだけど。(井元, ad loc.)

(31) If it **was** fine tomorrow, I **would take** a walk in the forest. (idem)

(32) S'il **faisait** beau demain, j'**irais** me promener dans la forêt. (idem)

日本語¹³、英語、フランス語以外にも、仮定節に過去時制があらわれる言語は多くあるので、以下、若干リストを増やしてみることにしよう。

(33) イタリア語：

Se tu **decidessi** di andare, **faresti** ancora in tempo. (坂本 1979, p. 260)
 もしいま君が行こうと決心するならば、まだ間に合うだろうが。

(34) スペイン語：

Si él **estuviera** aquí, yo creo que todo **sería** distinto.

(J. I. Luca de Tema, 寺崎 1998, p. 41)

もし彼がここにいたなら、すべてが違っていただろうと思う。

(35) ポルトガル語：

Se eu **fosse** rico, **iria** dar uma volta ao mundo. (富野 1989, p. 180)

もしわたしが金持ちだったら、世界一周旅行をするのだが。

(33)～(35)にみるように、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語では、現在の事実反する仮想において、帰結節ではフランス語と同じく条件法現在を使うが、仮定節ではいずれも接続法半過去を使うところがフランス語とはちがっている¹⁴。しかし、フランス語とそうにながらも、接続法現在ではなく接続法半過去を使うという点では、本稿で問題にしている「仮定節に過去時制があらわれる」現象にくわえることができる。

(36) ラテン語：

Si **viveret**, verba ejus **audiretis**. (松平 et alii 1987, p. 286)

もし彼が生きていたら、君たちは彼の声が聞けるだろうに。

(36)のラテン語の例では、仮定節、帰結節の両方で接続法未完了過去が用いられている。この形式は、現在の事実反する仮想をのべる際に用いられる。¹⁵

(37) ギリシア語：

εἰ οὐ **ἐποίησ**, καὶ γὰρ **ἂν ἐποίησιν**. (田中 1994, p. 132)

もしあなたがしていたなら、わたしもしていただろうが。

ギリシア語においては、仮定節にも帰結節にも直説法未完了過去を用いるが、帰結節には小辞 **ἂν** がそえられる。この構文は現在の事実反する仮想にも、過去の事実反する仮想にも用いられる。

(38) ロシア語:

Если бы {вчера/сегодня/завтра} была хорошая погода, мы поехали бы за город. (佐藤 1987, p. 167)

もしも {きのう/きょう/あす} よい天気なら、わたしたちは郊外に出かけたのだが/出かけるところだが/出かけることもあろうが。

ロシア語においては、仮定節にも帰結節にも直説法過去形に小辞`бы`をそえて用いることにより、(38)のЕслиにはじまる仮定節のなかの3つの時間副詞の違いが示しているように、過去・現在・未来のありえない仮定にもとづいてのべる文になる。

また、印刷の都合で例文は引用できないが、藤元 (1999, p. 120) によると、ペルシア語でも、反実仮想をあらわす仮定節、帰結節の両方で過去未完了形を用いるとのことである。

このように、系統のことなる言語で、過去性と仮定性の相関が広汎にみられることは、過去の分岐点に視点をおくことによって可能世界を展望するという分岐的時間の表象による説明にとって有利な事実であるといえよう¹⁶。

5. 日本語の反実仮想の「た」との対照

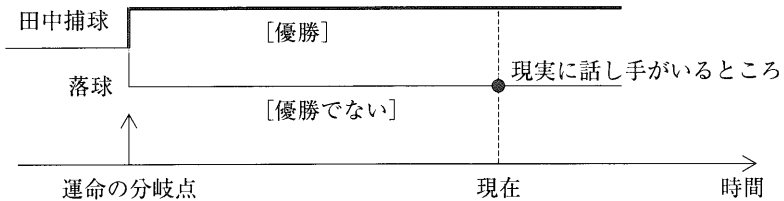
以下では、日本語における反実仮想の「た」を分岐的時間の表象によって分析する可能性を中心に論じ、あわせてフランス語との異同も明らかにしたい。その際参考になるのが、定延 (2004) による反実仮想の「た」の分析である。定延のあつかう「た」は、(30)のような例とちがって、文末(帰結節)で用いられるものであるが、仮定節で用いられる「た」との異同については適宜おきなうこととして、まずは定延 (2004) の論旨を、本稿の対象と関係する、つぎのふたつの点 (i), (ii)のみ見ておきたい。

(i) 反実仮想には2種類ある。ひとつは実現可能性がそもそもまったくない、ファンタジックな仮想。もうひとつは、実現可能だったがたまたま実現しなかった仮想である。(41) (42)は前者、(40) (43)は後者である。前者においては(42)にみるように反実仮想の「た」の使用は不自然であるが、後者においては自然である。

- (40) この仕事^がなければ、明日は釣りに行^{った}のになあ。(ibidem, p. 49)
 (41) 私があんたなら、明日は釣りに行くのになあ。(ibidem, p. 50)
 (42) ??私があんたなら、明日は釣りに行^{った}のになあ。(idem)
 (43) あの時、田中がボールを落とさなければ優勝だ^{った}。(ibidem, p. 52)

その理由は、後者の反実仮想のみが、(44)のような「運命の分岐」という図式でとらえられるからである (idem)。

(44)



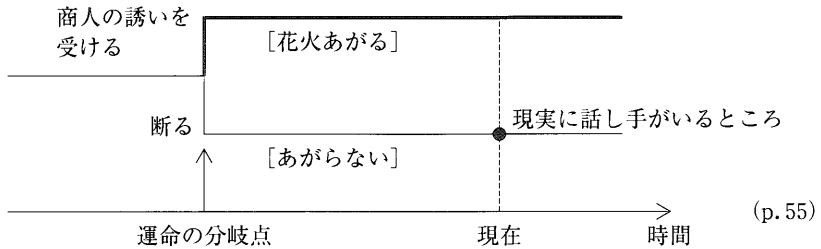
反実仮想の「た」は過去時を指示しており、運命の分岐点が過去にあることをあらわしている。(40)も同様に運命の分岐点によってとらえられるので、その分岐点の過去性を示す「た」がもらいられる。しかし、(42)が不可能なのは、「私があんたなら」という反実仮想が、ことなりゆきいかに関わらず、どんな場合でも実現可能性をもたないので、運命の分岐点によってとらえられないからである¹⁷。

(ii) 運命の分岐には、あとでとりかえしのつく分岐と、とりかえしのつかない分岐がある。後者の方が反実仮想の「た」は自然である。たとえばロールプレイングゲームで、あるアイテムを買わないかという商人のさそいをことわった相手に対して、ゲームを傍観していた話し手はつぎのようにいえる。

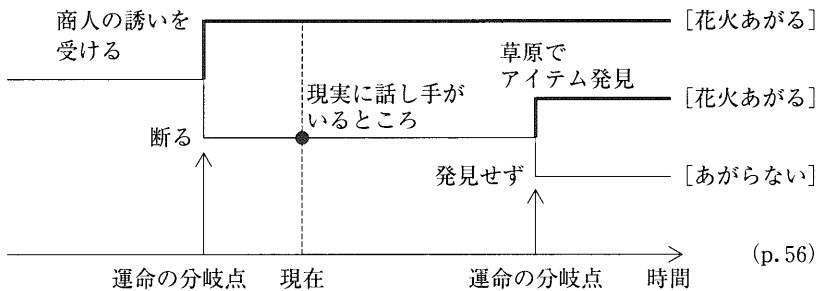
- (45) 誘いを受けてアイテムを買えば、ゲームのエンディング場面で打ち上げ花火があがるんだけどなあ。(ibidem, p. 53)
 (46) 誘いを受けてアイテムを買えば、ゲームのエンディング場面で打ち上げ花火があが^{った}んだけどなあ。(ibidem, pp. 53-54)

(46)は、いったん商人のさそいをことわれば、もうとりかえしはつかず、ゲームのエンディング場面で打ち上げ花火はあがらない場合 [(47)] には自然であるが、のちにべつ的手段をとることによっても、ゲームのエンディング場面で打ち上げ花火があがる場合 [たとえば草原で同じアイテムをさがし、拾うこともできる場合、(48)] には不自然である。

(47)



(48)



以上のような定延 (2004) の論をふまえて、つぎのようなことがいえる。

まず(i)に関しては、日本語は、フランス語とちがいで、実際に運命の分岐点に立つことが可能であったかどうかという、条件の実現可能性の区別に敏感であるといえる。しかしそれは(40)～(43)において「た」が帰結節についていることとも関連しているように思われる。日本語は係り受けの関係で文末にいたるまでモダリティ表現を出さないことも可能であるため、帰結節にしか「た」がつかない場合があるが、その際には、見返りに、仮定節から相対的に遠い文末にある「た」との連関がはっきりするよう、より明確に過去の運命の分岐点

に立つことができなければならないという制約が課されるのではなからうか。

実際、同じ日本語でも、仮定節で「た」を用いることに関しては、帰結節におけるほどの制約はなく、(41)においても、「私があんただったら」のようにいうことができるので、なりゆきによらず実現不可能な仮定か、それともなりゆきさえちがっていれば実現可能だった仮定なのか、という区別はもはや関与的ではない。このことから、本稿では、絶対に実現不可能な仮定に対しても、分岐点を発動することは可能であると考えたい。それはちょうど、3.4節でみた、フランス語の反実仮想をあらわす条件法で提案した図式と同様である。

一方、フランス語では、非現実の仮想が(41)(42)のような性質のものか、(40)(43)のような性質のものかによって文法的標示が変わることはなく、どちらにも < Si + 半過去, 条件法現在 > を用いることができる。それは日本語との対照でいうと、フランス語には条件法現在という、当該構文では帰結節専用の形態があるという事実と関連づけることができるかもしれない。すなわち、条件法は、分岐的時間の図式において、PDV からわかれ出た帰結を一意的に示すという特徴があり、日本語の帰結節で「た」を用いるときにくらべると時間構造中に占める位置が明確である。それに対して、日本語の帰結節で「た」を用いる場合は、それが過去のマーカーとして指す分岐点が完全に明確になっていなければ、(42) のように解釈がしづらくなるのである。

つぎに(ii)に関していえば、これも日本語の帰結節で「た」を用いるときにかぎっての特徴である。日本語の帰結節で「た」を用いるときは、(i)でのべたように、過去の分岐点が最大限明確に画定できなければならないという制約がある。その制約を満たすためには、(48)のように、のちにも運命の分岐点があるというのではなく、(47)のように、最終的（決定的）な分岐点が過去になければならないことになる。そして、ここでもやはり、日本語でも仮定節に「た」を用いることについては制約はなく、「誘いを受けてアイテムを買っ（てい）たら」という形は無差別に使うことができる。また、フランス語においても、(47)のような場合と(48)のような場合とで文法的標示に相違はなく、ひとしく < Si + 半過去, 条件法現在 > を用いることができる。この理由もまた、(i)と同様であると考えられる。

6. おわりに

以上、本稿では「分岐的時間」の表象を用いることにより、いくつかの言語

現象、とりわけ時制とモダリティとの連関を説明できることを示してきた。2節で図式を紹介したあと、3節で主としてフランス語の条件法への適用、および関連するかぎりで半過去などフランス語の他の動詞形態への応用を試み、4節では仮定性と過去性が連関しているという、分岐的時間の図式で説明可能な事例が他の言語にもあることを確認し、そして5節では分岐的時間の観点から日本語の反実仮想の「た」とフランス語の対応構文との対照について論じた。

最後に、本稿で行ってきた分岐的時間の表象による連関の説明の試みは、すべての事態提示の根源を時間性のなかに回収しようとする試みではないことをことわっておきたい。分岐的時間の概念自体、すでに純然たる時間性ではなく、あくまでも時間（や、時間に沿う事態展開）に対する見かた（vision）を示すものであり、認知の枠組みに対応しているものである。そうした認知のメカニズムを明らかにすることを通してこそ、時制とモダリティの連関を解明することができると思われる。

註

- 1 この論文は、2007～2008年度科学研究費補助金(基盤研究(C))課題番号19520414「日英語ならびに西欧諸語における時制の比較研究」(研究代表者和田尚明)、および2008年度科学研究費補助金(基盤研究(C))課題番号20520348「フランス語および日本語におけるモダリティの意味論的研究」(研究代表者渡邊淳也)の補助をうけている研究の成果の一部である。
- 2 もちろん、「同じ結果にいたりつく」という述べかたをあえてすることもあるが、その場合でも「別方向に向かっているが、たまたま同様の結果である」という趣旨であり、ことなる方向に向かっていることには変わらない。つぎの例文を参照されたい。
(i) **Si j'avais pris un autre chemin, si j'avais choisi un autre travail de préférence à celui-ci, il me serait arrivé peut-être également un accident [...]** (F. A. De Eckhart, *Traité et sermons*, p. 84)
ここでいわれていることは、「同じ m_0 にいたりつく」ことではなく、「 m_0 とはちがった m にいたりついていたかもしれないが、そこでも m_0 と同様のことがあったかもしれない」ということである。
- 3 定延(2004, p. 51)は、反実仮想に、「実現可能性がそもそもまったくない、ファンタジックな反実仮想」と、「実現可能だったがたまたま実現しなかった反実仮想」との2種類があるとしており、後者にしか文末(帰結節)に反実仮想の「た」が使えないことを指摘している。このことは、日本語の反実仮想に「可能世界型」と「領域移動型」があることを示唆しているようであるが、フランス語では、< si+半過去(假定節), 条件法(帰結節) > が両方のタイプの仮想にひとしく使えるという点で、事情がちがっており、二分法的分析ではなく統一

的分析をするべきであることを示唆している。フランス語と日本語の反実仮想の対照については、のちに5節で論ずる。

- 4 各用法への適用については, Watanabe (2001), 渡邊 (2004) を参照されたい。
- 5 前未来形が結果残存型の完了相 (Comrie 1976のいう *perfect*) をあらわすことに関しては住井 (1993) の議論が参考になる。
- 6 本稿でいう「視点」はまた, Wada (2001, p. 277) のいう *viewpoint* に対応するものであり, [être venu]のような完了を見切る時点は Wada (2001, p. 21) のいう *temporal focus* に相当する。一方, 分岐的時間を論じる際, Vet (1981) は本稿でいう「視点」と同様の意味あいでの「基準点」(*point référentiel*) という概念を用いているものの, Vet (1981) の「基準点」には, 一次的なもの (R) と二次的なもの (r) の区別があり (ibidem, p. 112), 実質的には Wada (2001) のいう *viewpoint* と *temporal focus*, そして東郷 (2007) のいう「視点」と「基準点」の区別を設けている。用語の選択には若干のちがいはあるものの, 問題とする事行に先立つ依拠点を設定するということは, いずれも本稿の「視点」と共通しており, そうした設定はこの議論の文脈では有効な方法であると思われる。
- 7 分岐的時間の表象を用いた本稿の説明と相互補完的に用いることができると思われるのが, 吉良 (2001) の提唱する「時間の不可逆性原理」による条件文の説明である。それは, 英語の *if* 節中に生じうる *will* を主たる対象とする研究であり, 本稿4節でみるような過去時制は扱っていないが, 条件文における時制の分布全般に対して有効な説明原理として参考になるものである。吉良 (2001) は, 「条件文 (If P, then Q) における先件 P と後件 Q には, ふつう, 原因と結果の関係 (因果関係) が見られる。[...] たとえ因果関係がなくとも, 先件 P と後件 Q には時間の後先関係だけは存在する。」 (ibidem, p. 78) とのべている。そして, 条件文においては, P (または P の予測性) が Q に先立っていないなければならないとする。この原則は, (19')においても, P を見る視点 t_{-1} が Q に先立っているというかたちで貫徹されており, フランス語の *Si* 節中の半過去や, 他の言語の仮定節中の過去時制 (本稿4節参照) を説明する際, 分岐的時間による説明と相互補完的に用いることのできる説明原理であるといえる。
- 8 詳細については Culioli (1990, pp. 135-155) 参照。
- 9 Vetters (2001) による条件法論で提出されている «*ultérieur du non-actuel*» という仮説もこれに近いといえる。しかしながら, そこで視点をさす概念として用いられている «*non-actuel*» は Touratier (1996) などにもみられる用語であるが, 「非=現在」と「非=現実」の両義をおおうものであり, 時制的解釈と法的解釈の両方をあらかじめ用語に担わせているきらいがある。一方, Barceló et Bres (2006, pp. 69-78) は, 対話性 (*dialogisme*) の概念を導入することで, *si* 節中の半過去を時制的に説明しようとしている。すなわち, *si* 節の内容は, 発話者による断定の対象にならず, 他者性をおびている。他者の言説をうけなおす際, それが自己の発話に先立っているという意味で過去性があるため, 半過去が用いられるという説明である。その他者性は多くの場合直接には観察できないが, つぎのような例では端的にあらわれている。

(i) *Interaction familiale*

Mère – La prof de math dit que tu écoutes pas en cours.

Fils – (mimant l'intonation de sa mère) J'écoute pas en cours ! j'écoute pas en cours ! Si j'**écouterais** pas en cours je serais largué et mes notes...
(ibidem, p.72)

- 10 その意味で, Gosselin (2006, p.174) が Martin (1983, p.140) の «le locuteur considère en t_{0-k} p comme possible et il sait en t_0 que p» という説明を < Si + 半過去, 条件法現在 > の構文を半過去が過去時を指示するという時制的図式によって説明する自説の補強にしようとしているのは, 筋ちがいである。

- 11 ここで, 条件法という形態が選択される理由は, P が他者の言説であることが, 明示されない視点 t_{-1} をたて, そこからみた分岐の時間のなかでの後方性をあらわすためであると考えられるが, P の時間軸上への位置づけはその不明確な視点からではなく t_0 からなされるという, いわば「二重基準」がみられる。「条件法か単純未来か」というパラダイムを問題とする Squartini (2004) によると, イタリア語, スペイン語においては, フランス語と同様, 他者の言説をあらわす用法を発達させているのは条件法のみである。それに対して, ポルトガル語には, 条件法のほか単純未来にも他者の言説をあらわす用法が存在する。

(i) Ao mesmo tempo desmentiu informações da imprensa segundo as quais os EUA **estariam** a treinar militarmente grupos opositores a Saddam.

(*Diário de Notícias*, 1/2/1999, cité dans Squartini 2004, p. 83)

同時に彼はアメリカ合衆国がサダム・フセインの反対派を軍事的に訓練している(条件法)という報道情報を否定した。

(ii) Ensino público do português **estará** ameaçado no Canadá.

(*Diário de Notícias*, 25/2/1999, cité dans Squartini, ad loc.)

ポルトガル語の公的教育はカナダにおいて危機に瀕しているという(単純未来)。

(i)においては, 主節の動詞 *desmentiu* が示す過去の時点を視点としていることにより条件法が選択されているが, そうした視点が明示されていない(ii) のような場合には単純未来が使用される。このように, ポルトガル語では, 他者の言説をあらわす条件法が使用可能であるためには, フランス語にくらべて視点が明確であることが要求される。しかし, 本稿筆者の考えでは, いずれにしても, 「明示されない視点 t_{-1} の地位が不安定である」という一点は, 言及される各言語で共通しており, その視点の不安定性への対処方法が, フランス語(や, イタリア語, スペイン語)と, ポルトガル語でこととなっているのである。前者においては, 明示されていない場合でも視点を t_{-1} において条件法を用いておきながら, P の定位に際しては視点を經由しないという扱い(上記でいう「二重基準」)をするのに対して, 後者においては, 視点 t_{-1} が明示されていない場合には条件法の使用そのものを放棄するという対処をしているのである。

- 12 «[Ce type d'énoncés au conditionnel] introduisent dans la situation une information qui se présente comme «nouvelle» au sens où elle constitue une autre donnée, à laquelle il convient de «réagir», dont il faut déduire des conséquences, qu'elles soient argumentatives — agir dans la construction d'un monde discursif — ou pragmatiques au sens d'agir dans le «monde» .»
(ibidem, p. 299)

- 13 日本語については, 古語にみられる,

- (i) 世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

(『古今和歌集』巻一)

のような「せ」を、過去をあらわす助動詞「き」の未然形とみなす説がある(松村編 1995, p. 99 は、「にせば」「なりせば」などの続きかたをする例の存在を根拠に「す」の未然形とみる説をしりぞけ、「どうしても「き」の未然形と考えるかなければなるまい」とのべている)。そうであるなら、(i)のような例も過去性と仮定性との連関の一例としてくわえることができる。

- 14 Guillaume (1927, pp. 49-50), Moignet (1974, p. 263) および佐藤 (1981 b, p. 115) は、フランス語に < si + 直説法半過去 > による仮定と < que + 接続法現在 > による仮定があることについて、que は「定言的な語 (mot qui pose)」なので潜在性をあらわす接続法を要請し、si はそれだけですでに「仮言的な語 (mot qui suppose)」なので直説法を要請するという説明をしている。しかし残念ながら、それはフランス語以外のロマンス諸語に拡張できる説明ではない。
- 15 ラテン語の反実仮想条件文の史的変遷および其時の変異については Fleischman (1982, pp. 61-64) を参照。
- 16 ギリシア語、ロシア語のように、過去の事実と反する仮想にも、現在の事実と反する仮想とおなじく過去形をもちいる言語においては、分岐点が発話時点からみて過去であることだけが示されていることになる。フランス語の場合大過去に相当する相対的に遠い過去でも、過去であることには変わらないので、このようなとらえかたをすることももちろん可能である。
- 17 ただし、これらふたつのタイプの反実仮想の区別については、定延 (2004) 自身が、「もちろん、話し手が表現した或る反実仮想がどちらの種類に所属するかは話し手の信念の問題であり、その点で反実仮想の所属が揺れることはあり得る」(ibidem, p. 51) といっており、截然と両者を画することはできないことをみとめている。

参考文献

- Adam, J.-M. (1999) : «Si hypothétique et l'imparfait», *Etude littéraire*, 25, 1-2, pp.147-166.
- Barbazan, M. (2006) : *Le temps verbal*, Presses Universitaires du Mirail.
- Barceló, G. J. et J. Bres (2006) : *Les temps de l'indicatif en français*, Ophrys.
- Bergson, H. (1888) : *Essai sur les données immédiates de la Conscience*, Presses Universitaires de France. [C'est la 28ème édition, parue en 1930 chez Alcan, que nous avons consultée]
- Berthonneau, A.-M. et G. Kleiber (2006) : «Sur l'imparfait contrefactuel», *Travaux de linguistique*, 53, pp.7-65.
- Busuioc, I. (2004) : «L'imparfait d'imminence contrecarrée en français et en roumain», *Revue roumaine de linguistique*, 49, pp.41-67.
- Celle, A. (1997) : *Etude contrastive du futur en français et ses réalisations en anglais*, Ophrys.
- Celle, A. (2006) : *Temps et modalité*, Lang.
- Comrie, B. (1976) : *Aspect*, Cambridge University Press.

- Confais, J.-P. (1990) : *Temps, mode, aspect*, Presses Universitaires du Mirail.
- Culioli, A. (1990) : *Pour une linguistique de l'énonciation*, 1, Ophrys.
- Curat, H. (1991) : *Morphologie verbale et référence temporelle en français moderne*, Droz.
- Damourette, J. et E. Pichon (1911-36) : *Des mots à la pensée*, 9 vols, d'Artrey.
- Dendale, P. (2001) : «Le futur conjectural versus devoir épistémique», *Le français moderne*, 69, 1, pp.1-20.
- Desclés, J.-P. (1995) : «Les référentiels temporels pour le temps linguistique», *Modèles linguistiques*, 32, pp.9-36.
- Fleischman, S. (1982) : *The Future in thought and language*, Cambridge University Press.
- Fauconnier, G. (1984) : *Espaces mentaux*, Minuit.
- 藤元優子 (1999) : 『エクスプレス・ベルシア語』白水社.
- Gosselin, L. (1996) : *Sémantique de la temporalité en français*, Duculot.
- Gosselin, L. (2005) : *Temporalité et modalité*, Duculot.
- Guillaume, G. (1927) : *Temps et verbe*, Champion.
- 郡司隆男 (2007) : 「反実仮想と日本語のアスペクト」『日本語学』26, 3, pp.22-32.
- 林迪義 (2001) : 「接続詞 si と真実」『フランス語学研究』35, pp.15-21.
- 林田遼右 (1982) : 「条件法の諸問題」『千葉大学人文研究』11, pp.69-85.
- Hintikka, J. (1962) : *Knowledge and Belief*, Cornell University Press.
- 井元秀剛 (2007) : 「過去と仮定性」『言語における時空をめぐる』(大阪大学言語文化研究科) 5, pp. 1-10.
- 吉良文孝 (2001) : 「時間の不可逆性とモダリティ」『英語学・英語教育研究』20, pp.69-92.
- Korzen, H. et H. Nølke (2001) : «Le conditionnel : niveaux de modalisation», P. Dendale et L. Tasmowski (éds.) : *Le conditionnel en français*, Université de Metz, pp.123-146.
- Kripke, S. (1963) : «Semantical analysis of modal logic», *Zeitschrift für Mathematische Logik und Grundlagen der Mathematik*, 9, pp.67-96.
- Leeman-Bouix, D. (1994) : *Grammaire du verbe français*, Nathan.
- Lewis, D. K. (1973) : *Counterfactuals*, Blackwell.
- Martin, R. (1983) : *Pour une logique du sens*, Presses Universitaires de France.
- 松平千秋 et alii (1987¹⁸) : 『新ラテン文法』南江堂.
- 松村明 (編) (1995⁷) : 『古典語・現代語助詞助動詞詳説』学燈社.
- Moignet, G. (1974) : *Etudes de psycho-systématique française*, Klincksieck.
- 大久保伸子 (2007) : 「Je t'attendais 型の半過去の表現特性と非自立性について」『フランス語学研究』41, pp.1-15.
- Perret, M. (1994) : *L'énonciation en grammaire du texte*, Nathan.
- Reichenbach, H. (1947) : *Elements of symbolic logic*, The Free Press.
- Rocci, A. (2000) : «L'interprétation épistémique du futur en italien et en français», *Cahiers de linguistique française*, 22, pp.241-274.
- 坂本鉄男 (1979) : 『現代イタリア文法』白水社.
- 定延利之 (2004) : 「ムードの「た」の過去性」『国際文化学研究』(神戸大学) 21, pp. 1

-68.

佐藤純一 (1987) : 『基本ロシア語文法』 昇龍堂.

佐藤正明 (1981 a) : 「時制の *emploi modal* への移行」『フランス語学研究』15, pp. 88-95.

佐藤正明 (1981 b) : 「*Proposition hypothétique si + SV* について」『文化』(東北大学) 45, 1-2, pp.17-28.

佐藤正明 (1986) : 「未来形と *modalité*」『東北大学教養部紀要』46, pp.288-308.

澤田治美 (2002) : 「時制と「仮定法」は別物－仮定的条件文を中心として」『英語教育』51, 7, pp.24-27.

Squartini, M. (2004) : «*Il Futuro e il Condizionale nelle lingue romanze*», *Revue Romane*, 39, 1, pp.68-96.

Stage, L. (2003) : «*Les valeurs modales du futur et du présent*», M. Birkelund et elii (éds.) *Aspects de la modalité*, Niemeyer, pp.203-216.

Sten, H. (1952) : *Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, Munksgaard.

住井清高 (1993) : 「前未来形の時間的用法に関する覚え書き」『千葉大学フランス文学研究』4, pp.13-31.

Tasmowski, L. et P. Dandale (1994) : «*Pouvoir : un marqueur d'évidentialité*», *Langue française*, 102, pp.41-55.

Tedeschi, Ph. (1981) : «Some evidence for a branching-futures semantic model», *Syntax and Semantics*, 14, pp.239-269.

寺崎英樹 (1998) : 『スペイン語文法の構造』大学書林.

東郷雄二 (2007) : 「*Je t'attendais* 型半過去再考」『フランス語学研究』41, pp.16-30.

富野幹雄 (1989) : 『スペイン語からポルトガル語へ』大学書林.

Touratier, Chr. (1996) : *Le système verbal français*, Colin.

Trévisse, A. (1999) : «A propos de repérages fictifs : variété des formes et construction du sens», *LINX*, 41, pp.39-59.

Vetters, C. (2001) : «*Le conditionnel : ultérieur du non-actuel*», P. Dendale et L. Tasmowski (éds.) : *Le conditionnel en français*, Université de Metz, pp.169-207.

Wada, N. (2001) : *Interpreting English Tenses : A Compositional Approach*, Kaitakusha.

Watanabe, J. (2001) : «*Le conditionnel du «discours d'autrui»*», *Etudes de langue et de littérature françaises*, 78, pp. 216-230.

渡邊淳也 (2004) : 『フランス語における証拠性の意味論』早美出版社.

渡邊淳也 (2007 a) : 「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よかったでしょう」か」型語法」『フランス語学研究』41, pp.54-59.

渡邊淳也 (2007 b) : 「問一髪の半過去をめぐる」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 52, pp.151-175.

Wilmet, M. (1997) : *Grammaire critique du français*, Hachette.